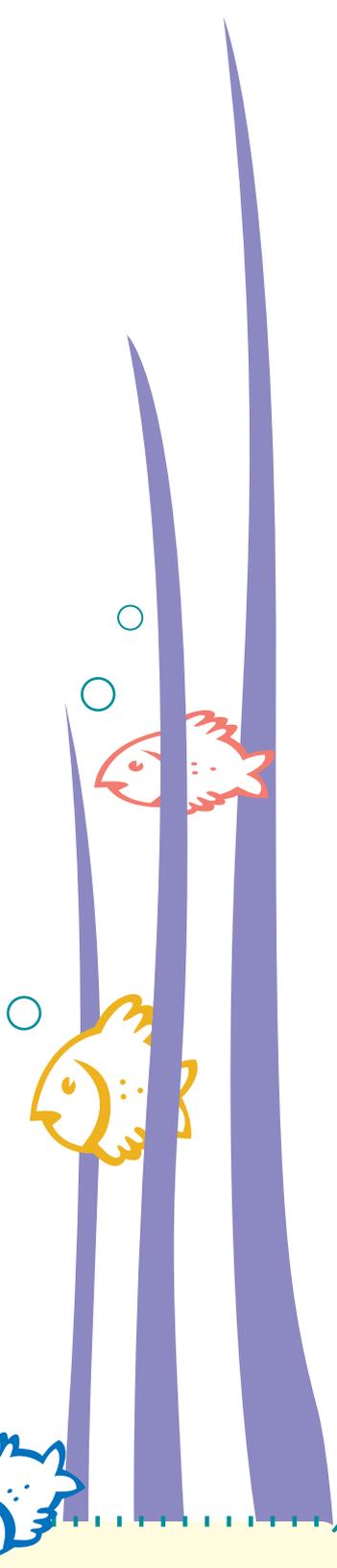


Newsletter of

日本サンゴ礁学会ニュースレター
2000 Vol. 6
Mar.

J C R S Japanese Coral Reef Society



連

1. サンゴ礁に暮らす人々 -4-
【モツを開ける】

載

2. サンゴしょう夜話 -4-
【ビキニ／エニウエタックの水爆実験】

3. 若手会員の眼 -5-
【若手研究者の夢】

連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -4-

モツを開ける

慶應義塾大学 近森 正

グンカンドリの島には、ふだん足を踏み入れることができない。一年間に一回か二回だけ、あるいは、飢饉の時にだけ、村の首長の判断によって島が解禁になる。

リーフの向こうの空が朝日を受けて、ようやく明るくなった。

礁湖を渡ってきたカヌーが、すでに二十艘も舳先をならべて待ち受けている。

「さあ、モツを開ける！」 静かな水面に大声がはねかえる。モツは環礁の小島を意味するが、そこは資源を保護しておくための村の共有地でもある。

「村人よ、よく聞け！」村のふれ役人マタオラ氏の声が続く。

「モツにあがったら、飛んでいるグンカンドリやカツオドリに石をぶつけて捕まえてはいけない。鳥の巣の下で騒音をたててはいけない。大きな捕鳥網を使ってはいけない。巣のなかの雛鳥は捕まえてはいけない。ネットイチョウの長い尾の羽を飾りにしてはいけない。ウミガメの卵を集めてはいけない。手のひらより小さなヤシガニは取ってはいけない。ココヤシの若木を切ってはいけない。ココヤシの実を鉤のついた棒で落としてはいけない。・・・よく聞け。よく従うように。」モツの掟がつぎつぎに唱えられる。

それが終わると人々はカヌーを浜に引き上げて、いっせいに島に上陸する。村人全員、老人も子供も、豚も連れてくる。子供の歓声と、片足を縄でくくられて強引にひっぱられる豚の悲鳴とで、無人の島が急に活気づく。

一番最後にあがってきたマタオラ氏は立ち止まって、満足そうにあたりを見回す。彼はモツのココヤシが充分に実をつけているのを確認したのだ。

いよいよモツの暮らしがはじまる。人々はタロイモの収穫と植え付けをし、ココヤシの実の果肉をあつめて、唯一の現金収入の手だてであるコブラづくりに精をだす。その間にカヌーの材木を切り出し、タロイモの水田の肥料にするために、地面に堆積している鳥の糞を集めなければならない。ラグーンにいるボラの稚魚を捕獲して養魚池に放つ仕事もある。

毎日が忙しい。しかし、たとえ飢饉の時であっても、モツには何か華やいだ雰囲気がある。なんととっても、村では獲れない美味しいヤシガニが食べられるし、夜になれば、歌や踊りがある。若者にとっては恋の語らいもあるのだから。

モツに滞在する期間は、その資源の状況によってさまざまである。十日間ぐらいのこともあれば、一カ月を超えることもある。こうして、ようやくモツが閉じられるとき、島の自然はふたたび静けさと、自らの呼吸をとりもどす。

島の人々は資源の過剰な利用を避け、永い間にわたってこの限られた環境のなかで生きてきたのである。



連載 2 サンゴしょう夜話 -4-

ビキニ/エニウエタックの水爆実験

金沢大学名誉教授 小西 健二

環礁ビキニの名は、私はじめ広島・長崎の原爆と戦後の水爆実験が生んだ惨劇を忘れぬ世代には、人類の悪夢の舞台として心に深く刻みこまれている。造語モノキニを生んだ水着の由来と聞き流すなどとてもできない。だが事前調査による膨大な情報の存在を理由に、この環礁と、エニウエタック環礁で深層掘削が行われ、ダーウインの火山島沈降仮説がはじめて検証されたことはサンゴ礁研究者の広く知るところ。USGSを中心に進んだ長年にわたる掘削試料の詳しい研究は、炭酸塩の岩石学・地球化学(例えばダイアジェネシスにと

ともなう相変化と酸素・炭素同位体比変動；プロトアクチニウムなどウラン系列非平衡法とストロンチウム同位体比による年代測定など)を著しく発展させた。人工地震波記録で追跡した不整合面を多孔浅層掘削で確認し、太平洋底ディップスティックとして、隆起サンゴ礁・陸棚堆積物(シーケンス層序)・深海泥(有孔虫殻酸素同位体比)の解析結果とともに、第四紀と新第三紀の海面変動記録を補完した。エニウエタックには野外実験場がおかれハワイ大の管理下で、化学・地学・生物・農学・水産学・医学といった分野や学際的な研究が行われた。80年代のBuddemeierらによる環礁内における天水・地下水・海水の循環に関する仕事はその一例である。

一方サンゴ礁における核実験や核廃棄物保管への賛否は、国際サンゴ礁会議でも非公式に抗議署名が行われるなど参加者のなかに学問とは別の緊張を産んだ。40年も前のことだが私達も「サンゴ礁のような軍事研究」と一部から批判されたりした。長い時系列(歴史)を追う地球科学者は、ダイナマイトや掘削で自然破壊をすると批判もされた。

しかしシサンゴ群体の骨格年輪学は、核実験のファールアウトを用いて造礁サンゴの成長速度をもとめたり、近過去の海水中の化学種や核種の変動を測定する局地的な環境解析から、やがて大規模トレーサーとして大気や海洋の循環や両者間の二酸化炭素の交換速度の算定、そして大気・海洋連結系から気候変動のダイナミックスという、次世紀に引きつぐ課題へと発展してきた。今やOD21掘削船で多忙な田中武男博士が、金沢大の卒論・修論で那覇新港(安謝)のイノーや琉球大熱帯生物圏研究センター(瀬底島)沖で採取したハマサンゴ(写真)の年輪別放射性炭素比や酸素・炭素安定同位体比を研究し、同海域におけるシューズ効果と核実験からのファールアウトを明かにしてから、20余年がたった。私達はビキニ/エニウエタックの水爆実験が、サンゴ礁研究の一里塚であったとともに、人類史の墓碑銘であることを忘れずに、今後とも自戒したいものである。



Contents

目次

- 連載1：サンゴ礁に暮らす人々4
「モツを開ける」
..... p.2
- 連載2：サンゴしょう夜話-4-
「ピキニ/エニウエタック
の水爆実」
..... p.2
- 会告：[日本サンゴ礁学会
第3回大会ご案内]
..... p.3
- 連載3：若手会員の眼-5-
..... p.3
- [日本サンゴ礁学会
1988/1999年度総会議事録]
..... p.4
- [サンゴ礁学会評議員会議事録]
..... p.5
- [国際サンゴ礁会議招致準備
小委員会議事録]
..... p.6
- お知らせ
..... p.7

会・告・欄


**日本サンゴ礁学会
第3回大会のご案内**

日本サンゴ礁学会第3回大会
(2000/2001年度大会)を東京・慶應義塾
大学にて下記の要領で開催します。皆様の
参加と協力をよろしくお願いします。

なお、発表申し込みの締め切りは6月末日、
発表要旨の締め切りは8月21日を予定していま
す。詳細は次号ニュースレターと学会ホームペ
ージに掲載します。

大会実行委員長：近森 正

期 日

2000年9月22日(金)～9月24日(日)

会 場

慶應義塾大学三田キャンパス
三田北新館ホール

プログラム

9月22日(金)
10:00～12:00

<日本サンゴ礁学会総会>

14:00～17:00

<公開シンポジウム>

「サンゴと礁と人々の暮らし」

サンゴ礁をめぐる自然、文化、経済」

・基調講演 "People's life on coral reefs Threats
of global warming and socio-economic impact"
国際サンゴ礁学会会長：

Dr. Terry Done (オーストラリア)

・パネルディスカッション

「サンゴが創る自然と人間のシステム」

コンピーナー：大森 信、討論者(予定)：

近森 正、木村 匡、広瀬慎美子、秋道智弥

9月23日(土)～9月24日(日)

10:00～18:00

<一般講演およびシンポジウム>

連載3 若手会員の眼 -5-



若手研究者の夢



今回は東京都立大学大学院理学研究科地理科学専攻博士課程の佐藤崇範がご紹介させていただきます。サンゴ礁近辺では最近少々？陰が薄くなってきた感のある都立大・地理ですが、内に秘めた「熱い」炎はまだ消えてはおりません。その中でも最も「熱い」心の持ち主であり、私の指導教官である堀信行先生は、ここ2年間付属高校の校長職を兼任されていらっしゃるため、なかなかサンゴ礁に近づけずにやきもきされております。先生はアフリカの景観や環境論など幅広く手がけておられるため、そんな一面しか知らない学部生から「佐藤さんは堀先生の研究室なのになんでサンゴなんか研究しているのですか？」と質問されて愕然としてしまったこともありました。あまりに悲しかったので、その夜、その学生の引き出しに『熱い自然』と『熱い心の島』をそっと忍びこませておきました。当の堀先生ですが、校長職もそろそろ終わりに近づいていることもあってか、「熱さ」がほとぼり始めております。先日の授業では「サンゴ礁研究の夢」というタイトルで1コマ熱く語って下さいました。さらに、新しい調査機材も購入され、いよいよ全力でサンゴ礁へ！という感じになってきております。

98年に学位を取得された浦田健作さんは、洞窟に潜って25年、カルスト地形の成り立ちを丹念なフィールドワークで研究され、現在も海中鍾乳洞などカルスト地形を求めて飛び回っておられます。沖縄の墓・葬送儀礼の変遷から死生観の変化を読み解こうと研究しているうちに、葬祭屋に就職が決まった修士課程の村田克明君、西表の魅力に取り付かれ、西表の全てが知りたいと熱く語る卒論生の高田夏子さんなどの他にも、高山植生、河川環境、農地の変遷など、私が所属する環境地理学研究室では多種多様なテーマを持った学生が一つの研究室に同居しており、様々な視点が存在する刺激的な研究室です。また昨年都立大を離れられましたが、マングローブ林の発達過程を研究されて学位を取得された室伏多門さんや、主婦業の傍らサンゴ礁地形を多くの海図から計測されている恩田(旧姓氏原)真理子さんもたびたびアドバイスを後輩に送ってくださる良き先輩です。さらに、お隣の環境変遷研究室には、サンゴ骨格に記録された過去の環境の復元に取り組んでおられる塚本すみ子先生は、教室内でサンゴの話ができる数少ないスタッフであり、その笑顔に救われています(注：学年は99/12現在)

このように、教室全体としては南の島々を愛する人間が決していないわけではないのですが、一緒にサンゴ礁へ調査にいっただけの方がいないのが、現在私の大きな悩みです。ちなみに私は塊状ハマサンゴの分布調査から始まり、サンゴの新規加入個体供給とサンゴ礁地形との関係についてへと研究の興味を膨らませております。また、堀先生もサンゴ礁地形形成の解明に新たなアプローチを始めようとしておりますので、同様の関心をお持ちの方々と議論を深めることができると考えております。また、当研究室に新鮮な息吹を吹き込んでくれる若い学生の新規加入も期待しております。ということで今後とも、よろしくお願いいたします。

日本サンゴ礁学会 1998/1999年度総会

議事録



日本サンゴ礁学会
1998/1999年度総会議事録

日時：1999年10月30日（土）午前9：30～11：00
場所：琉球大学共通教育棟
議長：中森 亨・中野義勝・菅 浩伸

< 報告および審議事項 >

1. 事務局および各委員会の1998/1999年度活動報告
2. 今年度の大会運営について
3. 審議事項
1999/2000年度予算案
4. 事務局および各委員会の1999/2000年度活動計画
5. 次年度大会について
6. その他

< 議事録 >

第2回大会総会の司会は土屋 誠がつとめた。総会出席者は委任状を含めて74名で総会が成立した。第2回大会総会の議長として中森 亨、中野義勝、菅 浩伸の3氏が推薦され、承認された。会長（山里 清）の挨拶に引き続き、議事が進行された。

1. 事務局および各委員会の1998/1999年度活動報告

(1) 事務局（松田伸也）：1) 会員動向（1999年9月30日現在）：通常会員221名（うち海外3名）、学生会員52名（うち海外1名）、賛助会員10名、団体会員5団体、会友会員13名、名誉会員2名、計303名。2) 1998/1999年度会計報告。次年度繰越金が多い点については、学会誌とニュースレターの発行が7月以降になったためであり、すでにこれらの発行に充当されたことを説明。

(2) 会計監査（大葉英雄）：会計監査の結果、適正に処理されていることを報告。

(3) 企画（中森 亨）：以下の3点を報告。1) 学会のロゴマークを設定した。2) 記念出版物「日本におけるサンゴ礁研究」は出版準備中であり、近日完成予定である。3) 国際サンゴ礁学会誘致に関する準備委員会が10月29日に発足した。

(4) 学会誌編集（土屋 誠）：学会誌「Galaxea」第1号刊行。学会誌は800部印刷し、うち500部は現在あるいは将来の会員配布用。300部は学会宣伝用に充てる。学会宣伝用の内訳は、100部を2000年の国際サンゴ礁学会（バリ島）で配布し、100部を沖縄で、100部を東京その他で宣伝用に使用する。宣伝用冊子は事務局が管理する。図書館の定期購読用としても宣伝を行なう。

(5) 広報（野崎 健）：ニュースレター第4号編集に遅れがあった点を説明。ニュースレターは350部印刷。学会ホームページは文部省学術センターへサイト登録を行なった。1999/2000年度中に学会のホームページを立ち上げる予定である。前回シンポジウム時のQ&Aの取り扱いについては勘案中である。

(6) 選挙管理（工藤君明）：報告事項なし。現評議員の任期は2001年6月までであることを確認。

(7) 白化問題特別委員会（土屋 誠）：学会誌「Galaxea」第1号の一部で特集を組んだ。今年度大会にて白化特別セッションを開催する。

2. 今年度の大会運営について

第2回大会委員長（土屋 誠）より10月29日に公開国際シンポジウム「サンゴの白化とサンゴ礁の未来」が沖縄県庁4階講堂で開催され盛況であったことが報告され、つづいて今大会の日程が紹介された。今大会では講演が多数であるため講演を2会場に分けたこと、手続きを簡略化するため座長の繰送り制を導入したことが説明された。大会は世界サンゴ礁保護協会の御協力を頂いたことを報告した。

3. 審議事項

1999/2000年度予算案
事務局（松田伸也）より1999/2000年度予算案が提案された。審議の結果、賛成多数で可決された。

4. 事務局および各委員会の1999/2000年度活動計画

(1) 事務局（松田伸也）：会員拡大への努力を行なう。

(2) 企画（中森 亨）：1) 記念出版物「日本におけるサンゴ礁研究」を刊行する。第1巻は14論文より成り、第2巻はデータベースといくつかの論文で構成される予定である。2) 国際サンゴ礁学会誘致に関する準備委員会を中心に開催時期や会場などを具体的に詰める。

(3) 学会誌編集（土屋 誠）：学会誌「Galaxea」第2号の刊行へむけて、国際シンポジウムで講演いただいたDr. Charles E. Birkeland と Dr. Ove Hoegh-Guldberg 両氏に寄稿の承諾を得た。第2号の投稿締め切りを2000年3月末に設定した。

(4) 広報（野崎 健）：ニュースレター発行の時期を、8月・10月・12～1月・3～4月の4回に設定した。1999/2000年度は予算に応じて特別企画を組み、1号増刊する可能性も検討中である。ホームページの立ち上げ・充実も電子化委員会で検討する。ホームページには学会が責任を持って運営する部分と、会員のボランティアで運営する部分を設け、両者を併せて充実したい。

(5) 選挙管理（工藤君明）：来年度大会までに、選挙の手続き・投票方法など選挙細則の見直しを行なう。

(6) 白化問題特別委員会（土屋 誠）：今年度大会で開かれる白化特別セッションの内容をうけて活動計画を決定する。

5. 次年度大会について

次年度大会実行委員長の近森 正より、2000/2001年度の大会を東京・慶応義塾大学で開催することが報告された。シンポジウムや研究発表について企画などあれば募集中である。

6. その他

国際サンゴ礁学会誘致準備委員会の立田 穰より、国際サンゴ礁学会誘致のためのマネープランについて説明。あわせて国際サンゴ礁学会評議員選挙などでの会員の協力を要請。

以上（文責：菅）

サンゴ礁学会評議員会

議事録



サンゴ礁学会評議員会 議事録

日時：1999年10月29日（金）10:00～11:25

場所：沖縄県庁4F会議室

評議員：出席者（21名）山里・近森・大森（保）・茅根
河名・菅・工藤・小西・下池・立田・土屋
中井・中野・中森・西平・林原・日高
藤原・松田・目崎・横地
委任状（4名）秋道・大森（信）・野崎・山野
欠席者（3名）長谷川・堀・松本

< 議 事 >

1. 報告事項

- (1) 各委員会報告（総会議事録と重複のため削除）
- (2) 次年度活動方針（総会議事録と重複のため削除）

2. 審議事項

- (1) 1999年総会の進行
議長団：中森・菅・中野 議長団で議事次第を作成する。
- (2) Q & A
1998年サンゴ礁公開シンポジウムの一般からの質問の解答をニュースレターに載せる。
- (3) 国際サンゴ礁学会誘致（中森・立田・日高）
原案を配布・誘致年度・開催地・誘致準備委員会の設立について議論が必要。

予算等の準備を考えると、2008年の誘致を目的とするのが適当との検討結果を示した。
経費の見積もりでは、189百万円（業者委託）、86.4百万円（委託せず）必要。

参加費38百万円として、150百万円、48.4百万円不足する。

・これに対して、2004年誘致賛成の立場から、2008年では先が長い、現評議員が活発なうちに、予算のあては先に延ばしても同じとの意見が出た。

・予算について、過去の開催状況の情報収集が必要。各省庁、財団のグラントのリストアップが必要。

・開催地については沖縄が大勢、2004年なら亜熱帯総合研究所が事務局に沖縄の関係者が多忙なら、沖縄外で検討してもよいのでは。

・今回の総会では誘致小委員会を立ち上げて、2008年、2004年両案で検討する。

委員として、中森・立田・日高に加え、土屋・大森（保）・工藤・茅根の評議員の他、鈴木款。

・検討結果を2000年6月の評議員会にかけ、それに従って2000年10月バリの国際シンポジウムで活動をする。

(4) 次年度大会

バリの国際シンポジウムが10/23～27の前後の巡検も念頭において、11月半ばに。大会委員長は近森、場所は慶応大学。

(5) 学会誌の配布について

- ・販売は事務センターに依頼する。
- ・図書室などへは団体会員入会または、購入を促す。
- ・継続的に購入を希望する場合、請求書とともに毎号送る。ニュースレターも必要だったら団体会員に。
- ・寄贈した方がよい機関については、リストを事務局でまとめ、決定する。

(6) 事務局に庶務を置く。

< 日本サンゴ礁学会予算計画 >

1998-1999年度予算残高（1999年6月30日現在）
786,493 円

1998-1999年度事業計画として6月30日以降支出・支出予定のもの。

・ニュースレター4号作成費	105,400 円
（広告費50,000円を差し引いた額）	
・評議員旅費（99.7.17開催分）	71,839 円
・ロゴマークデザイン料	100,420 円
・ニュースレター郵送料	68,800 円
・学会誌印刷料	440,000 円
合 計	786,459 円

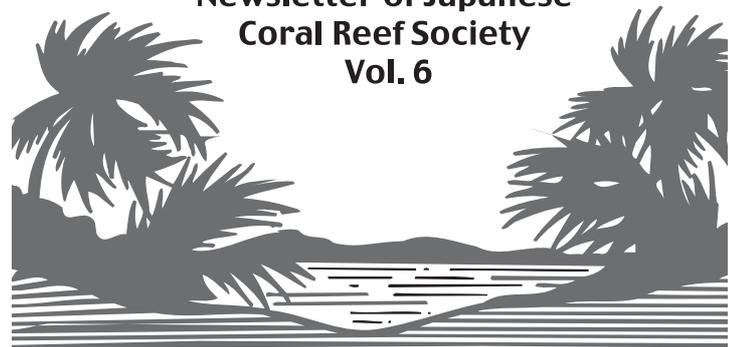
1999-2000年予算計画

収 入	2,400 千円
・会 費	2,200 千円
・広告料	200 千円
支 出	2,400 千円
・ニュースレター（5～8号）	600 千円
・学会誌	440 千円
・委託費	600 千円
・評議員旅費	460 千円
・郵送料	300 千円

以上（文責：茅根）



Newsletter of Japanese
Coral Reef Society
Vol. 6



国際サンゴ礁会議 招致準備小委員会 議事録



国際サンゴ礁会議招致準備小委員会 議事録

会場：東京都千代田区平河町日本海運クラブ
日時：平成12年2月23日（水曜日）19：00-21：00
出席者：茅根創・（菅浩伸）・工藤君明・鈴木款・立田穰
土屋誠・中森亨・日高道雄・（保坂三郎）・（山里清）
*ただし、（ ）は小委員会委員以外の参加者を表す。
委任状：大森保

< 議 題 >

1. 第10回国際サンゴ礁会議（2004年）誘致のための組織について

昨年、沖縄で開かれた日本サンゴ礁学会評議委員会で新たに設けられた国際サンゴ礁会議招致準備小委員会に第10回国際サンゴ礁会議誘致の可能性を検討することが評議委員会より委嘱された。その後の小委員会での議論と琉球大学でのアンケート結果を基に、立田・土屋・中森・日高委員は開催（準備）に必要な体制と組織などの試案を小委員会に示すこととなった。

- (1) 代表
- (2) 誘致準備および実行委員長
- (3) その他の係

2. その他

2004年国際サンゴ礁会議の誘致が決定された場合、誘致活動のために次の項目を決めておく必要がある。

- (1) 開催地
- (2) 会期
- (3) 収支見積もり
- (4) 2000年10月のバリ島における第9回国際サンゴ礁会議までの日程
 - a. 立候補の表明
 - b. 第9回国際サンゴ礁会議会場におけるサンゴ礁研究施設の紹介
 - c. パンフレットの作成
 - d. 巡検案と科学プログラム案の募集

< 審議事項 >

1. 第10回国際サンゴ礁会議誘致のための組織について

- (1) 代表
現日本サンゴ礁学会会長である山里清氏が推薦され、審議の結果了承された。
- (2) 誘致準備および実行委員長
現評議員の土屋誠氏が推薦され、審議の結果了承された。さらに、委員長職には多くの雑務が見込まれるため、補佐を置く。

(3) その他の係

以前報告したように、国際サンゴ礁会議を滞りなく運営するためには13の係が最低限必要と考えられている。その中で、特に誘致活動の際に明示する必要のある係について、以下のような担当者の試案を示した（敬称略）。

会計：立田穰・保坂三郎
募金：山里清・小西健二・近森正・工藤君明
プロシーディングス編集：茅根創・大森保・大森信・Woesik
巡検：菅浩伸・中野義勝・藤原秀一・横地洋之 松田伸也
科学プログラム：中森亨・日高道雄・野崎健・鈴木款
対外交渉：鈴木款
宣伝（パネル）：酒井一彦（琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所）
下池和幸（阿嘉島臨海研究所）・林原毅（水産庁西海区石垣支場）
宣伝（パンフレット）：中井達郎
審議の結果、これらの学会員が係として承認された。

2. その他

- (1) 開催地
種々の条件を吟味し、国際会議の会場として沖縄が最も相応しいとの結論に達した。
- (2) 会期
台風と観光シーズンをさけるため、5-6月または10月が望ましい。
- (3) 収支見積もり
国際会議請負業者の見積もりによると、1000人規模の場合支出総額は7000万～9000万円となることが予想された。一方、参加者の参加登録料の総額は、その半分程度であった。ただし、参加者の数が1000人を下回る可能性のあることが指摘された。
- (4) 第9回国際サンゴ礁会議までの日程
第10回国際会議の誘致活動を行うことが決定されたため、2000年10月のバリ島における第9回国際サンゴ礁会議までに早急に対処しなければならない項目に付いて、次の活動案を作成した。
 - a. 立候補の表明
土屋と中森はISRS等に対して立候補の表明を3月末までに行う。
 - b. 第9回国際サンゴ礁会議会場におけるサンゴ礁研究施設の紹介
日本のサンゴ礁研究を広く宣伝するため、バリ島の会場で琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所・阿嘉島臨海研究所・水産庁西海区水産研究所石垣支所の研究成果をビデオやポスターを用いて公開する。
 - c. パンフレット・ビデオ・ホームページの作成
バリ島の会議までに日本の立候補を表明するパンフレットなどを作成する。その予算はサンゴ礁学会が負担する。
 - d. 巡検案と科学プログラム案の募集
魅力的な巡検と科学プログラムを作成するため、担当者（菅浩伸と中森）は様々な分野から広く募集する。

以上（文責：中森亨）



お知らせ

日本サンゴ礁学会

ロゴ決定



大会議事録(p.4)にあるように、中森企画委員長と中井さんのご尽力により日本サンゴ礁学会のロゴが上記のように決まりました。今後、日本サンゴ礁学会関連の資料にロゴを使用するようお願いします。ロゴの使用を希望される方は事務局へご連絡下さい。

ご使用にあたって

<モノクロ使用の場合>



サンゴの部分
アミ70%



サンゴの部分
アミ40%

<カラー使用の場合>



サンゴの部分Y30+M50+C10

英文BL100

JCIRS部分Y20+M80+C100

I N F O R M A T I O N

学会ホームページについてのご案内



<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jcirs/jcirs.html>

日本サンゴ礁学会が、
文部省、学術情報センターにできました。

URLは

<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jcirs/jcirs.html>

です。事務局の協力を得て、広報委員会の中に学会HP担当
(山野、野崎、加藤、茅根、波利井、田中)を決めました。

学会HP担当メーリングリストは、

JCIRS-hp@geogr.s.u-tokyo.ac.jpです。

御意見等ありましたら、上記メーリングリストまたは事務局
にご連絡下さい。

学会誌 [Galaxea]

原稿募集

学会誌編集委員会です。

現在予定されているものだけでは2号は物足りなくなりそうですのでふるってご投稿下さい。先に学会誌の原稿の締め切りを3月末とご案内いたしました。若干遅れても結構ですのでよろしくお願ひいたします(日本サンゴ礁学会[sango], On Sun, 26 Mar 2000 22:06:18, メーリングリストより転載)。

●● 原稿送付先 ●●

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1番地
琉球大学理学部海洋自然科学科
日本サンゴ礁学会編集委員会
土屋 誠

編集後記

桜の便りも聞けるようになりましたが、皆様、ご健勝のこととお慶び申し上げます。
日本サンゴ礁学会ニュースレター No.6をお送りします。

今回は、1998/1999年度総会、第10回国際サンゴ礁会議招致、
学会ロゴ・ホームページなどの話題が掲載され、日本サンゴ礁学
会が本格的な活動を進めつつあることが実感出来ます。
次号は5月末日発行の予定です。



日本サンゴ礁学会ニュースレター

Newsletter of

Japanese Coral Reef Society Vol.6

2000年3月31日発行

編集・発行人/野崎 健

発行所/日本サンゴ礁学会

事務局/茅根 創 <kayanne@geogr.s.u-tokyo.ac.jp>

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学系地理

Fax : 03-3814-6358

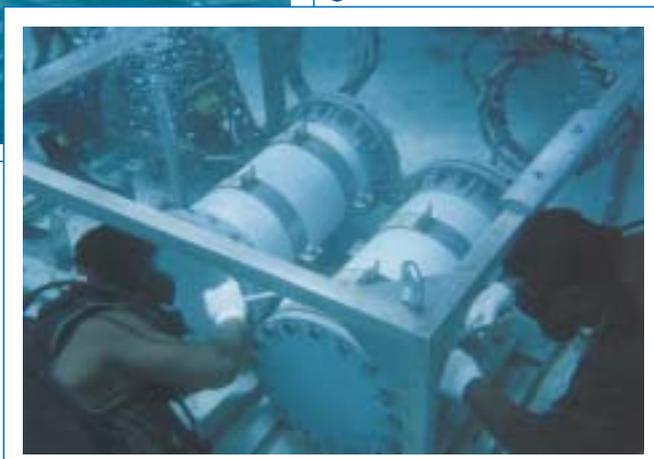
新しい時代に対応する

KIMOTO の環境モニタリングシステム



石垣島白保サンゴ礁に
設置されたクレスト号

パラウのサンゴ礁に
設置中の水中設置型PCO2計



クレスト号 はサンゴ礁における海水中・大気中のCO₂ 分圧などの炭酸系連続観測を目的とした計測プラットフォームです。ジーゼル発電機と携帯電話テレメータシステムにより、塩分、pH、DO、水温、日照などをpCO₂データと共に自動送信でき、沖縄県石垣島白保サンゴ礁において平成10年から1年間の連続計測に成功しました。さらに、海外のサンゴ礁に適用するために、クレスト号の計測システムを電池で稼働するように改良した水中設置型PCO₂計が、パラウのサンゴ礁に平成11年11月に設置され、現在、1年間の連続観測を継続中です。

クレスト号と水中設置型PCO₂計は、科学技術事業団の戦略基礎研究の一環として、東京大学などの研究グループ（研究代表：茅根東京大学助教授）と共同開発したものです。

営業品目

全炭酸・アルカリ度連続測定装置	二酸化炭素自動測定装置	COD自動計測装置
アンモニア自動計測装置	全シアン自動計測装置	クロロフィルa計測装置
全リン自動計測装置	全窒素自動計測装置	pH計測装置
ORP計測装置	水質自動計測装置全般	
ダイオキシン用ハイポリウムサンプル	PM2.5微粒粉じんサンプル	環境大気計測装置全般

すみよい自然環境を求めて!!

KIMOTO

ホームページ <http://www.kimoto-electric.co.jp/>
E.メール sales@kimoto-electric.co.jp

紀本電子工業株式会社

本社・工場 〒543-0024 大阪市天王寺区舟橋町 3-1
TEL 06-6768-3401 FAX 06-6764-7040
東京営業所 〒140-0013 東京都品川区南大井 3-23-12
TEL 03-3761-8191 FAX 03-3761-8194